

タイ国黒タイ族村落における祖先崇拜

小野澤 ニッタヤー

The Ancestor Worship Practiced among the Black Thai in Thailand

Nitaya ONOZAWA

Abstract

This paper is a part of findings from my field research conducted during the last two years, on the kinship system of the Black Thai, in their oldest community in central Thailand. The Black Thai were forcibly evacuated from the areas in present Laos and Vietnam to Thai kingdom for over two hundred years. Their kinsfolk relationship is still based on the firm belief and practice of ancestor worship. Their social stratification derives from the difference of the clans' statuses. Their clan is a patrilineal descent group comprised of lineages and sub-lineages. The lineage exogamy is a rule. After marriage, woman changes her affiliation from her father's clan and lineage to her husband's. In their cosmology of life and death, there are concepts of *kwan* (an essence of life) and *phii* (spirits), but none of the Buddhistic reincarnation. After death, the spirits live with their descendants forever in a special room (*kalar hong*), as the household spirits (*phii ruaen*). Their names are recorded in a book of spirits (*pup phii*). All sons are obliged to venerate ancestral spirits by doing a regular feeding and an occasional feast.

Key words : Black Thai, patrilineal descent group, lineages, exogamy, book of spirits

筆者は1994年以来タイ国中部ペチャブuri県 (Petchburi) カオヨイ郡 (Kaoyoi District) ノンプロン村 (Tambol Nong-prong) における調査をすすめているが、本稿では、祖先崇拜と親族組織の関係を中心に記述と考察をすす

めたい。黒タイ族はベトナム、ラオス、中部タイ等に分布するタイ系民族集団であるが、タイ国では、ラオソーン、ラオスワンダム、タイソーンダム、タイダム、プータイソーンダム等と呼ばれている。黒タイ族の呼称のい

われは彼らが黒いカンケーン（ズボンのような衣装）を使用しているところにあるとされている。調査村は、18世紀にベトナムおよびラオスから黒タイ族がタイ国内のペチャブリ県周辺に強制移住させられた際、最初に定着させられた村であり、現在でもタイ国最大の黒タイ人口を擁している。

第1章 タイの黒タイ族のおかれた歴史的状況

黒タイ族の最大の分布地域は北ベトナムで100万人以上いるが、なぜタイ中部に分布するようになったのかについての経緯を略述しよう。黒タイ族のタイへの移住はトンブリ時代（1767 - 82）に遡る。当時ラオスはルアンプラバーン、ピエンチャン、チャンパーサクの3つの国に分れていたが、チャンパーサクがトンブリの支配下にあつて、ビルマの影響下にあつたピエンチャン、ベトナムの影響下にあつたルアンプラバーンとの抗争が続いた。戦争で捕虜になったラオス人が中央タイに移住させられたが、その中に黒タイ族が含まれていた。チャオプラーヤ・マハーカサトスク（Chao Phraya Mahakasatsuek 後のラーマ1世王）は1779年に、ピエンチャンを攻略するがその時、数千人の黒タイ族をペチャブリ県に移住させる。ペチャブリは首都からの内陸路とチャイヤー、ナコンシータマラートなどへの海路が交差する戦略上の重要地点として、アユタヤー時代以来注目されていたが、当時森林地帯だったここを戦略都市（フアムアン・ターンタレー）をつくるために黒タイ族の大集団が移住させられた。1792年にはさらにラオ・プアン族を含む4000人の移住者が加わっている。ラーマ3世の時代、1833 - 35年にタイ軍によるディエンピエンフー攻略があり大量の黒タイ族の移住が見られた。1836、1838、1839年にはルアンプラバーンの王（Chao Rajawong）が黒タイ族の集団を

貢納として差し出すといったこともあった。ラーマ5世の時代にもラオス攻略が続き、黒タイ族のペチャブリへの移住が見られるが、1887年を最後にラオス、ベトナムからの黒タイ族の移住は見られなくなる。従って、現在約20,000人の人口をかかえるペチャブリ県の黒タイ族は19世紀末までの移住を基礎としており、東北タイ等に見られる黒タイ族集落はペチャブリ県からの2次的移住によって生じたものである。

第2章 黒タイ族の生と死に関するコスモロジー

タイ王朝は黒タイ族の移住に対して寛大な態度をとっていた。移住自体が国境の戦線を避けさせて保護する側面が強く、移住後も税制面その他で特権的な扱いをしていた。そうした事情から黒タイ集落は内婚的な閉鎖的共同体を維持することができ、形成から200年たった現在でも、多くの伝統的慣行を残している。中央タイ語への同化、仏教化を受けているが、父系出自集団は維持し、祖霊観念について固有の伝統を残している。

1. 神授の生命観

人間はすべてテーン（神 thaen）すなわち天界の国（muang fa）の神格の首長であるルアング（Luang）と呼ばれる最高神によって創造されたと信じられている。テーンには様々な名のもの（テーン・ナン、テーン・シング、テーン・チャド、テーン・ド等々）が存在するので、黒タイ語のthaenは特別な神の名前というよりも総称的な神概念と言える。テーン達は人間の様々な行動、行為、及び人間環境の状態を統御している。間違った行為を行った者や規範からの逸脱者はこれらのテーンによって処罰される。テーンは黒タイ族の人々を病気にし、苦痛を与え、最悪の場合死を与えることも出来る。

2. 黒タイ族における霊的存在に関する観 念 - - クワン、ピー、テー

黒タイ族の伝統的な観念にはタイ仏教徒のような輪廻転生観はない。彼らは死後祖霊（ピー phii）として子孫と同じ家屋敷における生活を続けると考えられている。彼らにおける他界観と靈魂観、およびクワン、ピー等の用語法は他のタイ諸族と相当な違いが見られる。以下、黒タイ族の霊的存在に関する信仰体系の概略を、他のタイ諸族との比較において検討していこう。

タイ諸族に共通する概念としてクワン（kwan）と、ピー（phii）があげられるが、仏教化、ヒンゾー化の進んだ南東タイ諸族の場合、これにテーブ（deva； tewadaa）というインド起源の概念が付け加わる。その概略は下記のように整理できると思われる。

クワン 人の生命実体、生霊；誕生と共に人の身体に宿り、人間の生存中その生命活動の主体となるとされる。

生命活動の休止とともにクワンは消滅するとされる。死後の靈魂の実体についてはウインヤーン（win-yaan）という仏教系の概念であらわし、これが輪廻転生にかかわり、地獄での刑罰の対象になり、再生の主体になるとされるが、これについては諸説ある。

ピー 広義の精霊観念であり、自然界の事物に宿る精霊、悪霊、祖先霊、土地の精霊（守護神）等を含む。

テーブ パーリ語、サンスクリット語のデヴァ（神）として伝

播した概念。本来の意味は須弥山（プラスメール山）の天界に住まうヒンドゥー・コスモロジーの神々である。しかしタイ諸族における用語法では、ピーの一部にあたる精霊や神格もテーブとされることがある。

上記のタイ諸族一般の用語法に対して、黒タイ族では、クワン、ピー等の意味内容にずれが見られる。

黒タイ族ではテーブ概念の受容は見られない。テーブにあたる概念をあらわす用語としてテーンがある。天地と人間の創造者テーン・ルアンおよびその天界に住まう配下のテーンは、祖霊集団を統御すると共に、生きている人間集団を統御すると考えられている。

生きている人のクワンに関してはそれほど差異は見られない。いずれも目、鼻、口等の身体の部位に宿る単体としてのクワンが32個¹⁾集合して一人の人のクワンとなるとされている。人の死後のクワンのありかたがタイ諸族と黒タイ族では大きな違いを見せる。仏教化を受けているタイ諸族ではいずれも死と共にクワンは完全に消滅するとされる。そして死者の靈魂はウインヤーンとして輪廻転生のサイクルに入るとされる。地獄における裁きと再生における功德の役割が強調されることによって、仏教的功德儀礼の意味づけがなされている。それに対して黒タイ族では、死者の靈魂はクワンのまま死体から遊離し、主神テーンの天界に赴き主神テーンに自らの死を報告し、祖霊（ピー）になる許可をうける。しかし祖霊は、家付きの靈魂として、子孫によって供食儀礼を受けなければならず、必ず生前住んでいた家に戻らなければならぬとされる。祖霊が「祖霊の部屋」に落ち着いて初めて葬儀が終了する。このように、黒タイ族においてクワンは死後の一定期間死体

から遊離した状態で存在する点、および祖霊になる霊的実体として連続性を持っている点等において、他のタイ諸族とは違っている。

クワン観念の含意の違いはピー観念の含意の違いに直結している。いずれもピーという言葉の含意の観念をもつ点では共通しているが、タイ諸族においてピーという言葉でまず想起される対象は自然界の精霊または悪霊である。一方、黒タイ族ではピーの概念はまず第一義的に、出自集団の「祖霊」を意味し、出自集団を指す場合もある。つまり他のタイ種族では、死後の靈魂実体はウインジャーン、または仏教の輪廻転生観の中に解消されているのに対して、黒タイ族ではクワンの延長上にあり、死後永続的な存続をするものとして祖霊のピーが観念されている。

第3章 親族組織の構造と祖霊観念

1. 黒タイ族における単系出自集団の体系とシング（氏族）

黒タイ族の社会では父系のラインを通して成員権が確認される出自集団が見られるが、そのうち最大の規模のものはシング（氏族sing）と呼ばれる。誕生の時点で新生児はいずれかのシングの成員になる。その成員権は父から息子、更にその孫と父系ラインで継承される。女性は、結婚後は夫のシングに所属を変更する。生きている期間、シングの名称は人々にアイデンティティーを与え、人々の社会的な地位と役割を決定する。シングの始祖は明確に辿られる祖先ではなく、神話的存在になっており、このレベルを氏族と考えることは妥当と思われる。北西ベトナムの白タイ族で見られるような、特定の氏族成員による特定の動物の崇拜²⁾は黒タイ族では見られないが、黒タイ族の場合、氏族の社会的な地位に応じて、特定の動物が祖霊供養の儀礼に供されている。

調査村では、下位のシングすなわち平民氏

族（ブーノイ phu noi）が8集団存在し、上位のシングすなわちかつての支配氏族（プーオオ phu thao）が1集団存在している³⁾。タイ王国によるタイ国内への強制的移住の後200年以上経っているため階層化した社会構造は弱められ、次第に分岐してきている。しかし信仰体系と伝統的慣行にかかわるいくつかの基礎的な概念は存続している。

更にシングの名前で氏族（シング）を上下の社会的階層と職業的地位に区別する制度は現在でも明確に意識されている。例えば「ルアンの氏族は医師（治療者）であり、ローの氏族は支配者である」（Ruang hed mor, Lor hed tao）という伝承的言辭の中に、明確に刻印されている。一般的に言ってタイ政府の支配下での日常生活においてこうした社会的階層の違いは生活のスタイルや実際の仕事の上での差異をもたらすものではなかった。彼らがサクディナー制（タイ封建制度）下のタイ王国に移住させられた時、彼らに与えられた地位は、他のタイ人と同様なプライ（平民 phrai）の身分であり賦役労働に携わらなければならなかった。かれらのうち、ほんのわずかの人が首長の地位を与えられ、タイ国家における貴族の地位を与えられた者は数える程でしかなかった。賦役労働制度が1898年に廃止された後、彼らはタイ人の大多数の農民の社会の中で農業を営み、社会的な活動を行う生活に適應していった。こうして黒タイ族の伝統的な社会的階層は儀礼的な場でのみ表出されるものとなった。それは特定の儀礼において特別な儀礼執行者（モー・セーン＝祖霊儀礼の専門家、ラーム＝仲人、クエイ・コック＝葬儀の司祭者）および用具が必要とされ、儀礼の次第が細々と指示されることに示されている。

シングへの所属は黒タイ族の個々人にとって第一義的な、重要なアイデンティティーになっている。特に死後の世界において、シングへの所属は彼らにとって非常に深い意味を

もっていると考えられる。黒タイ族の社会では人が死ぬと体はコーン (khorn=死んだ木) になると考えられ、クワン (kwan) つまり生命力を生成する生命実体は身体から遊離すると考えられている。このkwanは葬儀の司祭 (kuey kok) によってどのようにしてテーン (天界の神) への旅を成功裡におこなうかについての教示を受ける。死者のクワンはまず天界に赴きテーンに自らの死を届け、数日過ごした上で、村に戻りモー・セーンによって呼ばれるまで家の門の前で待つとされている。この死者の魂呼びの儀礼 (phithii riak phii khuen ruaen) は火葬の数日後、死者の配偶者か、息子によってとりおこなわれる。この時点で死者はクワンはピー (祖霊) と呼ばれる。天界から戻った霊魂は家の祖霊 (phii ruaen) の仲間入りをし、祖霊や子孫と共存する。以前から存在した先祖の霊と協力し子孫を見守り、永遠に尊敬される存在になると想定されている。

シングへのアイデンティティーを持つことなしには死者のクワンはテーンに接触することを許されないことは特記に値する。どのテーンに会うのかは特定されないが、クワンはテーンとの接触のあと祖霊 (ピー) に転化し、子孫を祝福したり、罰したりする力を持つ存在になるとされている。テーンに謁見した時にクワンはテーンによって認められ、家の先霊としての地位、権利、義務、および力を付与され、子孫によって崇拜される地位を獲得すると仮定することができる。なぜなら、すべてのクワンが祖霊として家にとどまることを許され、祖霊の地位を獲得するわけではない。このことについての詳細については後の説明に譲る。

黒タイ族におけるシングへのアイデンティティーがいかに重要であるかは、永年この村に住み、黒タイ族の信仰体系に深く同化したタイ人の警官が、自分の亡父に対する葬儀を全て黒タイの様式にのっとり行った事例に

よっても裏付けされる。私のインフォーマントの呪医 (モー・セーン) が、その警官の父親はテーンによって拒否されたことについて話してくれた。警官の父は、黒タイ族として出生していなかったためにシングへのアイデンティティをもたず、天界で留るべき場所が与えられなかったことが、他の呪医によって確認されたという。インフォーマントの言葉によれば「彼はシングをもたず、なんの帰属集団ももたないために、テーンたちは彼と生活を共にすることができず、彼を仲間に入れることもできなかった。」(mai mee muu, khao kub khao mai dai, khao mai hai khao, phror mai mee sing) ということである⁴⁾。

警官の父の霊魂は、その警官の夢の中に現れ、自分が留るべき場所がなく、恐怖にさらされていることを泣いて訴えたという。黒タイ族の観念からすれば、その父親は黒タイ族の家の祖霊になることは絶対にありえないのだ。その結果、警官は呪医の助言を受入れて、仏教式の葬儀を改めてとりおこなったという。これによって、警官の父親の霊魂 (win-yaan) は仏教徒タイ族の通常の輪廻転生観にのっとり、落ち着き場所を与えられ、再生の可能性を獲得したという。

黒タイ族の観念において家の祖霊 (phii ruaen) は通常、家の中の特定の部屋にとどまるとされているが、ある特定の期間かれらはテーンに会いに天界に行く。天界では彼らは、彼らのシングの名称によって分類され、身分相応の居場所が与えられる。王の一族のクワンは、最も高いレベルで最上階にあるルアン・パーン・ルアング (ruaen phaen luang 大きい家) にとどまる。貴族のクワンは2番目に高いレベルにあるルアング・パーン・ノイ (ruaen phaen noi 小さい家) にとどまる。他方平民のクワンは、ラムドイ (lum doi 低い丘) に留るとされる。これよりも低いレベルの人間や動物が留る更に低い場所もるとされる。これらの住居とそこにおける生活

様式は階層によって違っているが、そのすべては天界と一般的に考えられる muang faa の世界の中にある。仏教で地獄 (narok) と想定するものに近い場所は存在していない。

要約すれば、黒タイ族のコスモロジーでは muang khon (人間の世界) および muang thaen (神の世界) の 2 つがある。人々は生きている間、神の世界に対して接近することはできず、神、祖霊、およびその他の精霊による支配の下におかれている。人は一度死んで自分自身が靈魂になると、これらの 2 つの世界の間を瞬時に行き来することができるようになる。祖霊として彼らは人間集団、特に直接の子孫達を支配する力を獲得する。このように人間としての生活は真の生涯の最初の部分でしかないとされている。2 番目のそして永遠に続く祖霊としての生活は、子孫が彼らに供物をささげ、崇拜するという条件さえ満たされれば幸福なものである。祖霊は息子と共に居なければならないとする規範によって、息子たちは両親の靈魂の世話をしなければならない。従って、一族の系譜を存続させるべき息子を得ることは、祖霊に対して供物を捧げることと同様に重要である。

2. ピー・ディオウ・カン (大リネージ)

調査村の黒タイ族では同じシングに属する集団の中に、ピー・ディオウ・カン (phii diaw kan) と呼ばれる下位の血族集団が存在している。ピーという言葉は字義的には精霊を意味しているが、黒タイ社会では祖先を同一にする血族集団への固執という意味で使われている。ピー・ディオウ・カン (同一の祖霊の子孫集団; 祖先を同一にする系統) という言葉は、同じ祖霊グループの制御と権力の下に伏しているという意味で、緊密な関係を意味している。直接的な血のつながりを共有しているという意識は、同一祖先への遡及が困難で血のつながりをもつだけのシングという関係よりもはるかに強いものである。そう

した祖霊観念を措いても、ピー・ディオウ・カンの人々はシングの人々よりも日常的活動を通して関係しているということからしてはるかに強固なアイデンティティを有している。年配の世代では自分がどのピーに所属し、同じピーの中で誰と誰がどういう関係でつながっているのかについての意識は強いものがある。

筆者は黒タイ族の集団における親族集団内の相互行為を調査した結果を通して、彼らにおけるピー観念 (phii; 祖霊の継承ライン) およびピー・ディオウ・カン (phii diaw kan; 同一のピー集団) の観念は、リネージと呼びうると考える。

同一のピーに所属することを確認する象徴的な事物は存在しない。帰属を示す唯一のシンボルはパート・トング (paad tong) と呼ばれる、家の祖霊に対する定期的な供食儀礼の日に同一のピーの成員で集合することである。黒タイ族の暦法によると、1 ヶ月は 3 つの旬 (10 日) に分けられる。すべての旬は順序正しく名を付けられている。

1. mue kad
2. mue khod
3. mue huang
4. mue kao
5. mue kaa
6. mue tub
7. mue hub
8. mue haai
9. mue merng
10. mue perk

同一のピーの血統の集団は、同じ曜日にパート・トングの供食儀礼を行なう。平民氏族 phu noi の場合、ある一つの曜日に儀礼がおこなわれる。つまり、10 日に 1 回供食儀礼を行うことになる。一方、支配氏族 phu tao の場合、パート・トングの供食儀礼は、2 つの曜日に行われる。従って 5 日に 1 回の割り合いでとりおこなわれることになる。たとえばある平民氏族では kaa の日ごとに儀礼をおこない、支配氏族では kaa と perk の日にとりおこなうといった具合である。つまり、平民氏族の祖霊は 10 日ごとに食をとり、支配氏族の祖霊は、より頻繁に、5 日に 1 回の割り合いで食をと

っている。

祖霊による食事に関する説明は次の様なものである。祖霊たちが生きた人間であるかのように、それぞれの親族を訪問することができ、同じ曜日には同一のピーの祖霊と一緒に食事をする事ができる。

筆者が調査村で受けた説明は以下のようなものである。「同一のピー集団の祖霊は同じ曜日に食事ができる。祖霊たちはやってきて互いに集う。他のピー集団の祖霊はその食事に加わることはできない。」(*phii diaw kan, kin mue diaw kan, phii pai ma ha kan dai, phii uen ma kin duay mai dai*) 多くのインフォーマントによれば、祖霊は通常テーンの天界にとどまっていて、家にいつもいるわけではない。しかし子孫たちが祖霊と接触しようとするに戻ってくる。また、供食儀礼の日には確実にやってくる。パート・トングの日には彼らの親族に会い、子孫たちの行いを吟味する日だと考えられている。しかし、そのことは祖霊の生活が多少なりとも生きている人間による供食に依存している事実を示している。

3. コー（小リネージ）

同一のピー集団のなかに、コー（kor）と呼ばれる祖霊共有集団を認めることができる。コー（kor）は、同一の「祖霊の部屋」にいる祖霊を崇拜する数世帯の集団である。その祖霊集団は、同一のカロー・ホン（*kalor hong*）と呼ばれる部屋を住み場所としている家付きの霊魂であり、場合により数世代、数家族の霊魂が同居していることもあるが、彼らが一つのカロー・ホンを共有していて、その子孫集団によって崇拜されている限り一つのコーである。

一般的に言って、コーの概念はピーと類似している。コーもピーも成員は同一の祖先から発生している。しかしコーの祖先はより明確である。彼らの氏名はすべてコーごとに所有されている系譜台帳（*pup phii*）に記載され

ている。しかし現地の人々によってコーとピーはお互いに互換性をもって使用されていることは特筆される。例えば、コー・ディオウ・カン（同一コー関係）という代わりにピー・ディオウ・カン（同一ピー関係）ということばが使われるが、それはピーはいくつかのコーでなりたっており、いくつかのコーが集ってピーができあがっているという意味で間違いではない。同一コーの成員は、必ず同一ピーの成員である。しかし同一ピーの成員が、同一コーの成員であるとは限らない。こうした意味合いにおいて、コーはピーの下位リネージであると言える。

コーは、より緩やかに組織されたピーと比較して、強固な構造とアイデンティティをもつ集団であるということが出来る。ほとんどの成人の黒タイ族の人々はどのような親族関係でお互いに結び付いているかについて熟知している。また系譜台帳に記載されている祖先とどのようにつながっているかについての明確な知識をもっている。その系譜台帳の中では、死んだ祖先を示すのに、台帳の筆頭の人からの関係で呼称が明記されている。例えばマイ氏（仮名）の系譜台帳の場合、マイ氏の系譜台帳と名づけられ、筆頭にはマイ氏の両親の名前が記載されている。それに続いてマイ氏の父方祖父母、父方祖父系の曾祖父母、更にその上の世代という具合につながる。こうした直系の祖先が列挙されたあとに、傍系の未婚の伯（叔）父、伯（叔）母や若死をしたマイ氏の兄弟姉妹が続く。

これらの名前前列挙の順番は、供食儀礼（*sen ruaen*）にも適用される。祖霊は記載の順序で呼び上げられ、その順に従って供食を受ける。重要な祖霊は、重要度の低い祖霊よりも先に供食に預るのである。マイ氏の両親の霊魂はまず第一に呼ばれ供食をうけ、それに次いで他の霊魂たちが供食にあずかっていた。世代が遡れば遡るほど、軽視される傾向にある。これはコーの主との関係が世代を追

って希薄になるからである。従って、数百人といった多くの祖霊をかかえるコーの供食儀礼の場合、高いランクの祖霊は早朝に供食を受けるのに対し、低いランクの祖霊の場合半日も待たされることになる。

どのコーも、供食儀礼と祖霊崇拜に責任をもつ人の名前で社会的な識別をされている。彼らは祖霊の直系の息子たちで、祖霊を家に迎え入れる儀礼（スーブ・ピー）に責任をもち、従ってコーの長の地位をあたえられている。いずれの系譜台帳においても、マイ氏の系譜台帳の場合と同様に、他のコーの祖霊もそのコーの長の名を代表として列挙されている。あるインフォーマントの系譜台帳の場合、5つのコーの祖霊が全て列挙されていた。そのうち3つのコーは、その成員たちが既に他の村に移住している。例えば、ノーン・ケーのナーイ・ブーンのコーと書いてあるが、これはこのインフォーマントの家から5キロほどはなれたノーン・ケー村のブーン氏のコーという意味である。

コーは世代の経過の中で拡大する傾向があり、多くの小規模のコーを付随させるものになっていく。これは各世代に数人の男子がいた場合、その数に応じてコーは最終的に分岐し、新たなコーを生み出していくからである。しかし現在までの調査では、これらの分岐したコー内部で、主たる系列と支流的な系列の区別は見出されていない。

コーと呼ばれる集団について、その規模についての制限は存在しない。また、ピーとコーを区別する明確な基準も存在しない。しかし、コーは世帯にかかわる最も基本的な概念であり、生者と死者の関係および親族集団の関係の最も基本的な単位である。コーがどのようにして発生し、どのようにして成長するのかについて検討することは重要である。

コーは文字通りの意味は木や植物の皮を意味する。黒タイ語では家の支柱はサオ・コー（sao kor）と呼ばれ、その周辺は家の祖霊

（ピー・ルアン phii ruaen）のための特別な部屋があてられている。この部屋はカロー・ホン（kalar hong）と呼ばれる。どの家にもカロー・ホンがあるというわけではない。もし家に祖霊が留っていないならば、この部屋がある必要はない。もし息子が結婚し、家を新築して独立した場合、息子夫婦の家にはカロー・ホンは必要なく、ただ両親の家の祖霊への儀礼に時々参加するだけでよい。これは、彼の両親または片親が存命で、祖霊の儀礼に責任をもっているからである。両親と同居している息子や家族についても同様なことが言える。両親が共に死去した後で、初めていずれかの息子が祖霊の世話をしなければならなくなる。両親の霊魂はその家のカロー・ホンにとどまり、ピー・ルアン（家の祖霊）になる。この時点ですべての息子たちは、祖霊を受理し（スーブ・ピー）、自分の家に祀ることになる。その際、彼らは祖霊に対して最初の供食儀礼（セーン・ルアン）を行う。その際、用意されるもののうち次の2つが重要性をもっている。

- 1) カロー・ホン（kalar hong）と呼ばれる部屋で、祖霊はここを住み場所とする。この部屋は4つのパネルで囲われた四角の部屋で、入口はあるが、入口の戸は付いていない。
- 2) パップ・ピー（pup phii）または時にパップ・ピー・ルアン（pup phii ruaen）と呼ばれる系譜台帳で、これは家の祖霊の台帳である。祖霊の司祭者（モー・セーン）はこの台帳に基づいて祖霊を呼ぶので、家長になった息子は親の台帳を元にして自分の系譜台帳を作成しなければならない。

上記のように祖霊集団への所属は黒タイ族社会において重要な問題であるが、全ての死者が祖霊としての地位を得ているわけではない。黒タイ族において祖霊になるためには下記の様な資格条件を満たしていなければならない。

- ・祖先と血統的につながっている男性とその妻
- ・10歳以上で死亡した者（成人としての扱いを受けている者）
- ・自然死つまり病気による死亡者のみ。病気は祖霊によって引き起こされていると考えられている。
- ・自然死と考えられない死亡には自殺、自動車事故、水死、武器による殺戮、産褥死等多くの種類のものが含まれる。こうした死因で死んだ人は崇拜の対象にならず、家に留めることは許されない。彼らは系譜台帳に記載されない。彼らは大きな供食儀礼の際にのみ、屋外の門の前で供食を受ける⁵⁾。

上記と関連した観念として、病気は天界のテーンの意志によって引き起こされると考えられるため、非自然死はテーンや祖霊の意志によって引き起こされたものでなく、受け入れられないとされている。

4. 出自集団と婚姻規定

結婚の問題になると、親族集団相互の境界をはっきりと確認することができる。筆者の調査から導かれた祖霊と親族と関連した婚姻の規則の主要なものは下記の通りである。

- 1) 部族レベルの内婚規定 (endogamy) は、強調されている。これは黒タイ族とは異なった信仰体系や慣行をもつ人が姻族として入ってきた場合、家の祖霊に対して礼を失した行いをするによって家族全体に害悪をもたらすことに対する恐れと関係している。
- 2) 部族レベルの内婚 (endogamy) の下で、氏族レベルの外婚 (exogamy) つまり別なシングのメンバーとの結婚がルールである。言い換えれば、伝統的には同じシングの者同士が結婚することを禁じられていた。彼らは同じ親族同士と見なされていた。

従って男性が妻を捜すとき通常、婚姻規定に触れる危険がより少ない他村に求めている。

- 3) 氏族内の内婚 (endogamy) が禁止されているので、より身近な関係にあるピー (リネージ) 内の内婚が禁止されていたことは疑問の余地がない。理論的に、共通祖先関係はパップ・ピー (pup phii) と呼ばれる書き物 (系譜台帳) の中に記録されていて、明確に確認することができる。リネージ内の婚姻は、近親相姦禁忌に触れるための重大な規範破りとして批判され、リネージ内婚をした夫婦が活着している間、儀礼的な結婚によって認知されることはない。

第4章 祖霊信仰にかかわる儀礼の実際

祖霊は生きている子孫達によって供養を受け続ける。ピーに変化した死者は超自然力をもつことによって子孫に繁栄をもたらしたり病気にすることによって懲罰を与えることができる。しかし、ピーのもつ力は、彼らの子孫にだけ及ぶものである。この機能によって生者と死者の集団は関係を強化してきたといえる。5日に1回 (貴族氏族の場合) または10日に1回 (平民氏族の場合) ピー・ルアンは供食の儀礼 (パート・トング) を受ける。また3 - 7年に1回、各ルアンはモー・セーンの助けを借りて供食の大祭セーン・ルアン (sen ruaen) を行ない、一族の健康と繁栄を祈願しなければならない。セーン・ルアンの儀礼は、ノンプロン村の黒タイ族にとって非常な重要性をもっていた。過去においてそれは現在よりも高い頻度で開催されていた。現在では5 - 7年に1回になっているが、昔は3 - 5年に1度行われていた。現在でも3 - 4年に1回行うことが理想とされている。もし、3 - 4年を越えた期間がたっている場合、リネージの成員の誰かが不幸

に見舞われたり病気になったりした時が、セーン・ルアンをするべきタイミングとなる。セーン・ルアンの際、同一のピー・ディオウ・カン（リネージ）に属す祖霊が招かれ供食を受ける。従っていくつかのコーの祖霊が全て集合することになる。パート・トング儀礼が、コーのレベルの限定された祖霊に対して日常的に行われているのとは対照的である。セーン・ルアン儀礼はピー・ディオウ・カンのすべての祖霊が集る機会であるため、前のセーン・ルアン儀礼の後に行われた結婚について祖霊への報告が行われる場ともなっている。

過去のセーン・ルアン儀礼では主宰するルアンでは儀礼のために見栄えのする豚（平民氏族の場合）、水牛（貴族氏族の場合）を購入し、儀礼の日まで育てて屠殺しなければならなかった。しかし、現在では平民氏族の場合、市場で育ち上がった豚を購入して済ませるようになった。また貴族氏族の場合、市場で牛肉を購入するようになった。このような変容を受けているとはいえ、貴族氏族と平民氏族の区別は現在でも明確に保たれている。

セーン・ルアン儀礼のための供物としては下記のようなものである。屠殺されたブタの各部位の肉（それぞれ7片）、バナナの葉で包んだ餅米（7包）、料理された食べ物、甘菓子、各種の果物その他である。この供物はパーン・プアン（paan pheun）と呼ばれる器に入れて供えられる。さらに7組の箸、コップにいれた水、キンマと白酒が供えられている。

セーン・ルアンをとりしきるモー・セーンはピー（祖霊）の機嫌を損ねないように細心の配慮のもとに儀礼をすすめる。儀礼は豚の屠殺から始まる。屠殺した豚の血を家の前の階段に塗り付けてピー（祖霊）の注意を引く。黒タイ族の観念では、彼らの祖霊はテーンの天界にいるものとされているため、パート・トング儀礼やセーン・ルアン儀礼の際は祖霊の注

意を引いて呼び寄せなければならないのである。黒タイ族の暦の9月（陰暦）は、祖霊たちは天界でテーンの主宰する行事に列席しなければならないため、人間界に降臨することはできない。そのためセーン・ルアン儀礼を組織するのに適した時期はラオソン陰暦の1月、4月、6月、11月、12月等となっている。（最適の時期は6月とされている。）

セーン・ルアン儀礼は選ばれた吉日にとりおこなわれる。儀礼の知識のある人が供物の容器（パーン・プアン）に供物を取りそろえる。モー・セーンは儀礼扇をもって朝7時頃祖霊の部屋に入る。儀礼主催者はキンマのいれもの、水と儀礼用の礼服（ヒー hii）をモー・セーンに差し出す。その後で、主催者とその親族が、供物入れを持って部屋に入る。その際、義理の息子等姻族は儀礼用の礼服を着用しなければならない。その後、モー・セーンが師（クルー kru）に対する礼拝を行い、主催者との会食を行う。次いで、儀礼の過程に入り、系譜台帳にあがっている全ての祖霊の名前を読上げ、食事をとるよう勧める。この儀礼過程は極めて長時間を要する。最後のしめくりは参加者全員に酒をふるまいつつ、ピー・ルアンに子孫と親族の加護を祈願することである。その後、祖霊送りが行われ、全ての客人が引き払う。セーン・ルアン儀礼はこれで終了する。しかしモー・セーンと主催者および男子近親者は祖霊の部屋に残り、クワン強化儀礼（パング・タイ paeng tai）やファイ・モー儀礼（fai mo モー・セーンの師の霊への供食儀礼）を行う。

第5章 結論

以上の記述から黒タイ族社会において見られる祖先崇拝の儀礼体系が彼らのもつ単系出自集団と密接な関係をもっていることが確認できた。このことはタイ諸族の研究においていくつかの重要な含意をもっている。そのい

くつかを列挙し今後の研究課題を提示することによって結論に代えたい。

(1) 黒タイ族における単系出自集団についての課題

タイ国のタイ族(タイ・ノイー)を中心とする研究の中では、親族組織は双系制であるという説が有力であった。その根拠は財産の均分相続、仏教化等が論じられてきている。わずかに、北タイの研究者の中で、祭祀組織として母系の単系出自集団が機能しているという指摘があるに留まっている。タイの黒タイ族は移住後200年が経過しているが、本稿で示したように父系の単系出自集団を極めて明確な形で残している。現在祖霊信仰を中心とする祭祀組織としての色彩が濃厚で、「祖霊の部屋」、系譜台帳、供食儀礼等によって成員の範囲を確定し、社会集団としての機能を果している。均分相続的慣行と被支配者としての歴史からして、この単系出自集団がもつ経済的な機能は大きくはないが、婚姻に関してははっきりとした近親相姦禁忌の規制を機能させている。ベトナムにおける原型では氏族の土地所有と関係して大きな経済的機能も保有していたと考えられる。このように見ると、タイ諸族のある種の原型を示すとされる黒タイ族における単系出自集団の研究は、従来の定説に修正をせまるタイ系に関する比較研究の端緒となりうると思われる。

(2) クワン観念とピー観念について

従来のタイ研究の主流が、タイ国におけるタイ族中心であったために、大伝統としての仏教文化を中心的に扱い、精霊崇拜、その他土着的伝統に定位する信仰体系の研究は周辺の、補足的な研究として進められてきたきらいがある。本稿で示した、テーン - - ピー(祖霊) - - クワンの検討は、それ自体で従来のクワンとピー観念を二項対立的に扱ってきた諸研究に再検討を提起していると考え

る。タイ諸族における仏教化の過程でウインヤーン観念および輪廻転生と功德の観念がどのように、クワン観念を変形させ、またピー観念を否定的な極に追いやって行ったかについて、今後慎重な検討が要請される。

注

- 1) 人の身体に宿るクワンの数は30、28等とされることもある。東北タイの例では何百という報告もある。32という数に収斂していったのは仏教の影響によると思われる。
- 2) ベトナムの白タイ族はシング・ロー等シングの名称等で黒タイ族と共通している。しかし、白タイ族のロー・カム氏族の成員は蛇を傷つけることをしないのに対して、黒タイ族のロー・カム氏族は祖先崇拜の儀礼のために水牛を屠殺する。
- 3) 平民氏族のシングの名称はロー・ノイー(Lor Noi)、ルアング(Ruang)、ウイー(Wee)、トング(Tong)、クワング(Kwang)、カー(Kaa)、ラング(Lang)、ルー(Luu)である。また支配氏族のシングの名はロー・カム(Lor Kam)である。
- 4) 男性の場合、この例のように黒タイ族の成員権を獲得することは困難であるが、黒タイ族以外の女性が黒タイ族リネージに嫁入した場合、黒タイ族の成員権獲得は容易である。(夫のリネージの成員権をとり、夫とともに祖霊になる。)
- 5) 事故死がおこった場合、その妻子がリネージの成員権をもたない状態においやることがある。サーン氏(仮名)は酒に酔って階段から転がり落ち落命した。彼は婚資・労働奉仕の支払を終わって、正式の婚姻手続きを済ませていなかったため、残された妻と息子(2歳)はサーン氏のリネージの成員権をとれないままになった。(つまりサーン氏のリネージの祖霊になることができない状態になった。)このケースでは息子は母方の成員権を獲得した。

参考文献

Bang-on Piyaphan, *A Historical Study on the Laotian People in*

- the Western Part of Thailand*, Ministry of Education's Research Report, Nakorn Prathom Teacher's College, 1988 (in Thai)
- Briggs, Lawrence Palmer, "The Appearance and Historical Usage of the Terms Tai, Thai, Siamese and Laos", *Journal of the American Oriental Society*, Vol.69, 1949
- Cohen, Paul and Wijeyewardene, Gehen(eds.), "Spirit Cult and the Position of Women in Northern Thailand" Special Issue No.3, *Mankind*, Vol.14, No.4, 1984
- Fippinger, Dorothy Crawford, 1971 "Kinship Terms of the Black Tai People", *Journal of Siam Society*, 59(1):65-73.
- Hickey, Gerald C., "*Social Systems of Northern Vietnam: A Study of Systems in Contact*", Ph.D. Dissertation, University of Chicago, 1958
- LeBar, Frank M., Gerald C. Hickey, and John K. Musgrave, *Ethnic Groups of Mainland Southeast Asia*, New Haven: Human Relations Area Files Press, 1964
- Mayuree Wadkaew, *The Study of Social Structure of Lao Song*, Master Thesis, Kasetsart University, 1978 (in Thai)
- Nookul Chompoonich and Wanida Phisespongsa, *A Cultural Study of the Tai Song in Mu-ban Koh Raet, Amphoe Bang Len, Changwat Nakhon Pathom*, Bangkok: UNESCO, 1986
- Pedersen, Lise Rishoj, "The Influence of the Spirit World on the Habitation of the Lao Song Dam, Thailand", *The House in East and Southeast Asia: Anthropological and Architectural Aspects*, Scandinavian Institute of Asian Studies, 1982
- Potter, Sulamith Heins, *Family Life in Northern Thai Village: A Study in the Structural Significance of Women*, Berkeley: University of California Press, 1977
- Sams, Bert F, *Tradition and Modernity in a Lao Song Village of Central Thailand*, Ph.D. Dissertation, University of California, Los Angeles, 1987
- , "Black Tai and Lao Song Dam", *Journal of Siam Society*, 76: 100-20, 1988
- Sumitr Pitiphat, "The Religion and Beliefs of the Black Tai, and a Note on the Study of Cultural Origins", *Journal of Siam Society*, 68, No.1:29-38, 1980
- Sumitr Pitipat, Banthorn Ondam & Poonsuk Thammaphimuk, *Lao Song: Research Report*, Thammasat University Press, 1978 (in Thai)
- Turton, Andrew, "Matrilineal Descent Groups and Spirit Cults of the Thai-Yuan in Northern Thailand", *Journal of the Siam Society*, 60, No.2, 217-256, 1972
- Vasana Aroonkit, Lao Song Rural and Social Structure, *Journal of the National Research Council of Thailand*, Vol.19, No.2, 1987 (in Thai)